



7  
クロスワードパズル

「興味がおありですか」

サユリさんにそう訊かれ、どう答えたものかと考えていたら、

「曾<sup>そ</sup>我<sup>が</sup>さんは、もしかして、クラリネットを吹かれるんですか」

と核心をつかれてしまった。それでなんとなく、「いえ」と答えてしまい、

「興味というか、この〈鯨オーケストラ〉というのは何だろうかと思ひまして」

と核心から外れてみたら、

「わたしが所属しているオーケストラです」

意外な答えが返ってきた。

「この岡<sup>おか</sup>というのは、わたしのことで——」

「そうなんですか」

「そうなんです」

あらためてサユリさんに——オカサユリさんに視線を向けると、彼女もこちらをじっと見ていた。

「あの——」

と動揺して口ごもってしまふ。

「ええと——あれですよ、オーケストラっていうのは、あの——クラシックの方の、あのオーケストラってことですよね」

「他にオーケストラってあるんですけどっけ」

「ええ、そうですね。ジャズの方でも楽団の名前にオーケストラと付けることがあります」

「あ、もしかして、曾我さんはジャズを演奏されているんですか」

そう訊かれて、少し迷った。

「そうなんです」と快活に答え、だからクラシックの方はまるで門外漢なんです、とありのままそう答えようかとも思った。

でも、そうしなかった。

これまでも何度か同じような場面があつて、恥ずかしくて自分の素性を明かしたくないときは、  
たいてい、

「親父おやじがですね——」

と、ごまかしてきた。

「親父がジャズ・オーケストラのバンマスをやっている、クラリネットを吹いていたんです」

「吹いていた？」

「ええ。いまはもう亡くなつて——楽団は存続しています、親父はもういません」

「そうだったんですね」

サユリさんは壁の貼<sup>は</sup>り紙に視線を移した。

「バンマスって、バンドマスターのこと——楽団の団長のことですよね。みんなのリーダーで、指揮なんかもして？」

「そうですね」

たびたび繰り返してきた親父の紹介を、また繰り返した。

「基本的にクラリネットを吹いていましたが、ときどき、楽器を持たずに指揮もしていました」

「じゃあ、同じですね」

「同じ？　というと？」

「わたしたちのオーケストラも指揮者がいなくなつてしまつたんです。みんなから、『団長』と呼ばれていました」

「亡くなられたんですか」

「いえ、たぶん生きているんじゃないかと思えます。でも、いまのところ行方不明で——あ、なんかすみません。行方不明の話ばかりで」

そこでサユリさんは少し笑い、テーブルを片づけながら話を聞いていたミユキさんも、つられて笑っていた。

「なので、オーケストラは一度、解散せざるをえなくなつて——ここ最近なんです、団長を探し出して、オーケストラを再開しようという話になつたのは」

「ということは、その団長がクラリネット奏者だったんですか」

だとしたら、あまりに話が出来すぎている。

父が亡くなったときとまったく同じだからだ。

あのとき、父の楽団はいったん解散し、あたらしいクラリネット奏者を募集して、バンドマスターにふさわしい人物を選出する必要があった。楽団員の誰だれもが、父に代わる適任者などいないと嘆

いたが、誰か——たぶん、モカシンの新田さんあたりだ——が、

「哲生君がやったらいいんじゃないか」

と言いだした。

「そうだよ、それが一番だよ」

「哲生はクラリネットも吹けるから一石二鳥だし」

皆が「そうだ」「そうだ」と頷き合った。

どう考えても、僕がリーダーにふさわしいはずがなく、この「一石二鳥」という言葉に楽団員の誰もが頷いてしまったのだと思う。

たしかに僕は父親の背中を見て育ち、父親のようになりたいとは思っていた。でも、クラリネット奏者とはかくとして、到底、バンドマスターになるような器ではない。それは自分が一番よく分かっている。僕だけじゃない。たぶん、楽団員の誰もがそう思っていた。

それでも、その役割を引き受けることにしたのは、自分が引き継ぐことで楽団が存続するならば、かたくなに拒絶するのは、父に対しても楽団に対

しても誠実さを欠いていると思ったからだ。

それで、覚悟が決まった。

いずれにせよ、バンドマスターなどと言っても、かたちばかりのもので、実際には、ベテラン揃いの楽団なのだから、僕の存在は彼らが父の幻影を呼び寄せるためのアバターのようなものではない。

「いいえ」

急にサユリさんの声がボリュウムを上げて耳に戻ってきた。

「うちの団長はチェロ奏者でした。クラリネット奏者は純粹に募集しているんです」

「岡さんは——」

と僕は貼り紙に記された彼女の名前を確認した。

「岡さんは何を演奏されるんですか」

「わたしはオーボエなんです」

「オーボエですか」

オーボエとクラリネットは兄弟のような間柄と

言っている。音色も近く、とりわけ見た目がよく似ていて、遠目に見たら、見分けがつかない人もいるかもしれない。

——と、そこで話に休符が打たれた。

僕も話すことがなくなり、サユリさんもおそろくひととおりに話し終えたのだろう。僕としては、これ以上、音楽やクラリネットの話がつづく、自分から正体を明かしてしまいそうで、明かしてしまったら、「募集」の二文字に興味を示しているのではないかと思われてしまう。

それは本意ではなかった。

僕の興味はとびきりおいしかった（土曜日のハンバーガー）にあり、これはもしかして、毎週土曜日に食べに来ることになるのではないかとすでに予感していた。このハンバーガーだったら、〈バーガー・ログ〉で紹介しても、きっと誰も文句を言わない。

でも、申し訳ないけれど、誰にも教えたくな



った。このおいしさをみんなとシェアしたいのではなく、ただただ独り占めしたい、と初めてそう思った。

だから、話すことがなくなつて沈黙が流れ、その沈黙に見切りをつけて、

「ごちそうさまでした」

と、ただそれだけを言えばよかったのだ。

にもかかわらず、僕はいま一度、貼り紙を眺め、最初に尋ねたことを、

「ええと——」

と繰り返してしまった。

「ええと——あの、〈鯨オーケストラ〉という名前なんですけど——」

そう言いかけると、

「団長のあだ名なんです」

サユリさんは僕の問いかけを遮るようにさらりと答えた。僕が父について繰り返して話してきたように、サユリさんもおそらく、楽団名の由来を幾度となく説明してきたのだろう。

「団長は鯨みたいに体の大きい人なんです。それ

でそんな名前になったんですが、これから再開するオーケストラには、もう少し違う意味も込められてるんです」

そんなことを聞いてしまったら、その先を聞かずにおれない。

「とうとう?」

「ええ。それはですね——そうだ」

サユリさんは何かいいことを思いついたかのようには急に声のトーンを上げた。

「曾我さんは、このあと、お時間ありますか」

「ええと、そうですね——」

今日が土曜日であることを、心の中にひらいた手帳で確認した。

「今日は仕事が休みで、特に予定はありません」

そう答えると、サユリさんはミユキさんに、

「ちょっと、曾我さんを工場にお連れしてもいいですか」

今度は声のトーンをぐんと落としてそう訊き、

「うん。店の方は大丈夫だから」

気のせいかもしれないけれど、ミユキさんは僕

の顔をちらりと見てから、そう答えた。

\*

僕は最初、サユリさんが口にした「工場」が、「会場」と聞こえ、それは聞き間違いであったのだけれど、実際に、サユリさんが連れて行ってくれたところは、その聞き間違いが半ば当たっていたことを示していた。

ただ、その場所が「工場」にして「会場」でもあることを理解するまでには、少々、時間を要した。そこにはいくつかの出来事や歴史が絡んでいたし、実際に、その建物に足を踏み入れなければ実感できないところもあった。だからこそ、サユリさんは僕にその場所を見せたかったのだらう。そこへ辿り着くまでのあいだ、彼女はそこが「チョコレート工場」と呼ばれていたことを説明してくれた。

「無垢<sup>むく</sup>チョコ工場、なんて言う人もいて——とい

うのも、チョコレートのお菓子をつくっていたというより、そのもとになる無垢チョコをつくっていたからで——」

「でも、いろいろと事情があつて何年か前に工場は廃業になつてしまつたんです。それからしばらくのあいだ、ほつたらかしになつていたんですけれど、あることがきっかけになつて再利用したかどうかという話になつたんです。たまたま、わたしもミユキさんも、そのプロジェクト——と言つたらいいんでしょうか——工場を再利用する計画にかか関わることになつて——」

「というのも、その計画と、わたしたちのオーケストラが、まったく偶然なんですけど、鯨という言葉がきっかけになつて結びついたんです」

食堂を出て工場まで十分もかからなかつたように思う。

「こちらです」

とサユリさんは砂利の敷かれた細い路地を先に立って歩き、これまでのことをゆっくりページをめくるように話してくれた。

しかし、まったくもって百聞は一見にしかずで、そうして路地を歩きながら聞いた話が、

「ここです」

と招き入れられた工場の中に入った途端、

(そういうことか)

と言葉以上の力によって理解できた。

かつて、そのチョコレート工場がどんな様子であったかはもちろん知らない。たぶん、チョコレートをつくるための道具や機械が所狭しと並んでいたのだろう。が、それらはすべて撤去され、足を踏み入れるなり、身をすくめてしまうほどのがらんとした広い空間がそこにあった。

おそらく、そこへ至る砂利道がずいぶんと狭かったせいだろう。トンネルを抜けたら急に海がひらけたような、そんな開放感にも似た快さがあった。

とはいえ、それは工場の中の空間の話であり、

実際は、その空間に立ち上がりつつあるものが重要だった。

一見、それが何であるかは分からない。

がらんとした空間のおよそ半分ほどを占め、芸術的と言っていていくらい複雑な鉄骨が組まれていた。そして、その複雑な構造物に支えられて、何やら「白いもの」が異様な存在感を放ちながら宙に浮いている。

「鯨の骨です」

サユリさんがそう言う前に、なぜか、そうではないかと思っていた。「鯨」によって結ばれたと言っていたし、どういうものか、このがらんとした空間に鯨が——その骨が——こんなふう存在していることを、僕はもうずっと前から知っていたよ。たような気がした。

(どうしてだろう?)

「わたしは詳しいことは知りません。でも、まだ三割くらいだそうです」

サユリさんの言う「三割」は、「計画」と呼ばれているものが、鯨の骨の標本を組み上げること

であり、その全工程のまだ三割くらいしか進んでいないという意味だった。

(どうしてだろう?)

と僕はもういちど胸の中で繰り返した。

あたかも宙に浮いているかのように見えるその骨は、たしかに三割ほどしか組み上げられていなかった。が、僕にはその巨大な全体像が容易に想像できた。しかも、それは骨だけではなく、完全な状態で海を泳ぐ鯨の姿だった。

そうして見えない鯨の姿を頭の中に描くのに夢中になっていると、

「ちよっと、こちらへ来ていただけますか」

いつのまにか、サユリさんはがらんどうの空間の隅の方において、そこにはずいぶんと古びた一台のアップライトピアノが置かれていた。空間の床も壁も天井もすべてが白で統一されているので、その広大な白の中に黒いピアノがぼつんと一台置かれているのが、なぜかしらチャーミングに見えた。グランドピアノではないので当然かもしれないが、いかにも小さく感じられたのだ。

「ここに、この鯨の骨が発見されたときの記事があるので、ちょっと読んでみます」

そう言って、サユリさんはピアノの譜面台に立て掛けてあったタブロイド版の新聞らしきものを手にし、該当するページを探り当てると、少し声を低めにおさえて読み上げた。

この町に古来、伝えられてきた伝説がある。それは二百年も前のこと、町を流れる川に海から大きな鯨が迷い込み、川を遡る途中で力尽きて息絶えた。その巨大な亡骸なきがらを埋葬するために〈鯨塚〉がつくられ、それがこの町のガケを形成するに至ったと言われている。

その伝説の〈鯨塚〉が先日の大雨で崩壊した。幸いにも、誰かが命を落としたり、家屋や店舗が取り返しのつかない被害を受けることはなかった。しかし、三丁目六番地の長らく空き地になっていた一帯がガケ崩れを起こし、ガケ下の遊歩道の一部を土砂で覆い隠した。そのあと急速に雨が小やみになったので、かろうじて倒壊や水没をまぬが



れたが、住宅と住宅のあいだの切れ目に大量に土砂がなだれ込み、その土砂の中から、幻と言われている二百年前の鯨の骨があらわれた。

「というわけなんです」

サユリさんは新聞をたたんで譜面台に戻し、それからピアノの鍵盤けんばんをしばらく眺めてから、「ラ」の音をポーンとひとつ鳴らした。

「いい音ですね」

それは自然と口をついて出た感想だった。実際に、とてもいい音だったからだ。

「ええ、おんぼろピアノなんですけど」

「いえ、ピアノも悪くないですが、この空間がいんです。楽器を奏でるのにちょうどいい響きを残しているように思います」

「ええ、そうなんです」

サユリさんはもう一度、「ラ」の音を鳴らし、目を閉じて、

「ここでオーケストラの音を鳴らしたいんです」とそう言った。

そういうことか——と急に理解が深まった。

この広い空間に、〈鯨塚〉から発掘された二百年前の鯨がよみがえり、団長がいなくなつて解散したオーケストラが再び音楽を奏でるために、ここによみがえる。

「鯨オーケストラ」

それはまるで、なかなか解けなかったクロスワードパズルの答えであるかのように快く響いた。